

福岡女学院チャペル パイプオルガン建造の理念について

鈴木 雅明

今回のオルガン建造にあたって、その理念と実践の方法について、若干の記述を試みたいと思います。

①オルガン建造の目的について

パイプオルガンは、ひとつひとつその用途や環境に応じて入念に準備された構想に応じて建造されるものであり、単なる建物に付随する設備としてではなく、生きた音楽を奏でる楽器として、1台1台が人格（楽器格？）ともいべき個性を持つものです。従ってオルガンを設置しようとするときには、その持ち主（ないし奏者）となるべき人とオルガンビルダーが、事前にその目的や使用方法について、また音楽的理想像についての共通認識を持つことが、非常に重要であり、そのことがオルガンの最終的な品質に大きな影響を与えます。

福岡女学院の場合の建造の目的には、ひとつには、学院でもたれる礼拝の用に正しく供せられ、その神賛美の道具として典礼を揺るぎなく支えること。主には会衆の賛美を伴奏し、前奏や後奏など礼拝内の音楽が、（単なるBGMではなく）十分に意味を伝えるために奏でられること。ふたつめには、そのオルガンが、学院で行われる音楽教育と研究のためにも十分に資すること。特に、将来その必要性に応じて、オルガンの専門的な教育にも十分用いられ、学内外を問わず、豊かな音楽的活動にも供せられるべき品質を備えていることが必須である、と認識しております。その結果として、音楽文化を次の世代に伝え、この学院でのオルガン音楽体験が学生の若い感性に働きかけ将来において大きな意味を持ちうるよう、十分に音楽的雄弁さを備えたオルガンを設置することが、今回の課題であろう、と思います。

②歴史的様式の採用について

さて、あまりにも長い歴史を有するオルガンは、その時代や地方に応じて多くの変化を遂げてきましたので、日本におけるオルガン建造の際にも、多くの様式的可能性があります。その中で、今回の「礼拝と教育」という二本の柱にもっとも相応しい様式を選び出すことは決して容易ではありません。

オルガンの様式変化の最も大きな動因は、典礼の様式によるものでした。特に、会衆が歌うことがなかったカトリック教会と、会衆の歌をオルガンで支えようとしたプロテスタント教会のオルガンの様式は大きく異なります。そのプロテスタント教会にも、北ドイツやオランダ、中部ドイツ、北欧など多くの地方ごとに異なった様式が発展しましたが、今

回は、礼拝と音楽の双方の視点から、最も重要だと思われる中部ドイツの様式をお手本として選びました。

ここでいう中部ドイツとは、主にザクセンとテューリンゲン地方のことであり、このオルガン風土にこそ、あの J.S.バッハが育ったのです。プロテスタント（ルター派）の典礼と音楽との関係において、J.S.バッハは避けては通れない最も中心的な存在のひとりであることは言うまでもありません。今日わが国に建造されたオルガンで、バッハが演奏されないものは皆無でしょうが、意外にも、正しくバッハの様式を追求した楽器はほとんど建造されていません。今回は、ですからザクセンとテューリンゲンの歴史的オルガンの建造様式を手本として、その理念をこの学院のチャペルに実現することで、礼拝と教育の双方への音楽的奉仕を実現したいと思います。

このような歴史的な様式観を現代のオルガン構造に反映させることは、一見時代に反することのように思われるかもしれませんが、オルガンに限らず、音楽をするための楽器は、19世紀から20世紀にかけて、ただひたすら機械としての性能の追求にさらされ、人間の自然な感性からひたすら遠ざかってきました。特に、オルガンは、キリスト教教会がまだ社会的な意味を正しく担っていた18世紀半ばまでに、その様式的完成を迎え、その後は、オーケストラやオペラなどの他様式からの影響によって大きな変化にさらされたので、オルガンがコンサートホールではなく、キリスト教教会における典礼的意味を担うには、遅くとも18世紀半ばまでの様式を採用することが、絶対的条件である、と言っても過言ではありません。

③ザクセン・テューリンゲンの様式について

J.S.バッハに縁の深いザクセン・テューリンゲン地方は、古来東西と南北の交通の要所にあたり、多くの文化が錯綜し交錯していた場所でした。その結果、イタリア、北ドイツなどの初期バロック時代からの影響も受け、17世紀から18世紀にかけて、この地方独特のオルガン土壌が培われたのです。

その特徴は、まず多くの8フィートのレジスターです。ストリング系と呼ばれる径の細いパイプが非常に好まれ、同じ8フィートのストップでありながら、多くの音色を有するので、さながらロマンティックなオルガンのように優美で声楽的な演奏が可能になります。また、リード管やその他のストップとあわせて、全体として非常に色彩感が豊かであり、力強い音色と非常に繊細な表情とを併せ持つ、変化に富んだ音楽が可能で

また、もうひとつの大きな特徴は、バッハの音楽に見られる複雑な対位法的な書法を実現できる構造です。これは、主にミクストゥールと呼ばれる高い倍音を集めたストップの構造に関わるものです。北ドイツ的、またはフランス的なミクストゥールを用いて、バッハの対位法的な音楽を演奏することは、事実上響きの混乱を巻き起こし、声部の判別が不可能になってしまうのですが、その書法の透明度を保つために、テューリンゲンとザクセンのビルダー達は、ミクストゥールに3度管を加えたり、倍音構造を変化させることで

様々な工夫を凝らしています。そのことにより、バッハの対位法的書法が明らかに表現できることとなり、バッハの背後にある神学的な音楽へのアプローチを代表する対位法的な音楽語法を、正しく響きにおいて実現できることになるのです。バッハにとっては、音楽の書法は、神の創造された自然界の法則と同じように、神が整えられたものですから、その響きの法則を実現することは、神の栄光をあらわすことに他なりません。そして、オルガンが、実際的にその音楽語法を正しく実現できる構造をもっていることは、すなわちバッハの求めた神賛美の具体的な実現のひとつに他なりません。

④ガルニエ・マルクとヨーテボリ大学オルガン文化センター（GoArt）との共同作業について

さて今回、このような歴史的オルガン建造の理念を実践するにあたり、その最も相応しい建造家としてガルニエ・マルク氏を推薦しております。ガルニエ・マルクは、わが国に建造した多くのオルガンが証明しているように、現代における最も重要なビルダーのひとりです。彼は、歴史的なオルガン建造理念に基づいているだけでなく、注文主の感性や意識に応じて、柔軟に対応できる許容力をもっており、オルガン建造を双方の共同作業として実現しようという姿勢を堅持しています。また、ヨーロッパで生まれ育ったオルガンの歴史的様式を、気候風土の大きく異なった日本に建造するための具体的な工夫においても、非常に積極的であり、その技術力においても最も信頼にたるビルダーのひとりです。

そしてさらに、今回は初めての試みとして、ザクセン・テューリンゲンのオルガンを深く研究し、多くの資料を既に有しているスウェーデンのヨーテボリ大学オルガン文化センター（略称：GoArt）の協力を得ることができるようになりました。このGoArtでは、大学とヨーテボリ市の協力のもとに、ヨーロッパ全体の共同財産としての歴史的オルガンを調査し、その代表的な様式を再建築する際、その建造過程のすべてを逐一論文や資料として公開し、現代における歴史的オルガン建造の真の実践的研究を行っている稀有な組織です。このGoArtには、ビルダーやオルガニスト、音楽学者たちが研究員として参加し、驚くべき精密さと積極性をもってその研究を進めており、今や全ヨーロッパのオルガン文化における重要都市が、彼らの主導のものにネットワークを作ろうと進めています。

そのGoArtに所属するただひとりの日本人オルガンビルダー・横田宗隆氏が、今回この福岡女学院のオルガン建造にあたり、GoArtにおける研究成果や資料を提供して下さることになっております。横田氏は、10年以上にわたるアメリカでのオルガンビルダーとしての経験を基に、GoArtにおける中心的な存在のひとりとなっており、ザクセンおよびテューリンゲンのオルガンについても、詳しい調査研究をしておられます。具体的な共同作業の方法については今から検討されるべきことですが、この共同作業は、必ずや大きな成果を生むことを信じております。

以上、非常に長くなりましたが、福岡女学院におけるオルガン建造に関わる理念と実践方法について、その方向性を概説させていただきました。このことが福岡女学院における将来の発展に寄与し、そのことによって、この国におけるキリスト教教育と神の御国の発展に供せられんことを心よりお祈り申し上げます。

2003年9月12日